

聖マリアの無原罪教育宣教修道会創立者

聖カルメン・サジェスの生涯

# *Educare es amar*

(教育は愛なり)



聖マリア女学院中学校高等学校第四代学校長

アナ マリア カレロ

## 序

私たちの聖マリア女学院中学校高等学校は1963年、スペインの「聖マリアの無原罪教育宣教修道会」によって創立されました。

わずか20名の生徒で出発してから、30年(53年)近い歳月が過ぎようとしています。

この間、すでに2000名(5000名)を超える卒業生を送り出し、

『教育は愛なり』

という創立者の言葉のもとに聖マリアの教育は岐阜の地に深く根を下ろし、大きな花を咲かせています。

では、聖マリア女学院の母胎となった、「聖マリアの無原罪教育宣教修道会」はいつ、どのように、誰の導きによって生まれたのでしょうか？

1992年に迎える(た)修道会創立百周年を機に創立者、聖カルメン・サジェスの生涯を紹介したいと思います。

## 1. 誕生

### ◇ 洗礼

1848年4月9日の朝3時に、スペインのヴィックという町に、サジェス家の二人目の子供としてカルメンは誕生しました。

父の名前はホセ、母はフランシスカといいます。

生まれて二日後に洗礼が授けられ、カルメン・フランシスカ・ロサというクリスチャンネームをいただきました。

### ◇ にぎやかな家庭

後からつぎつぎに弟妹が生まれたので、家の中は大変にぎやかになりました。母は毎日午後、子供たちを集めて、良い話を聞かせてやりました。

夕方になって、父が仕事から帰ってくると、子供たちは皆、喜んで迎えました。父は母よりも性格が明るくて、子供好きで、子供たちと遊ぶのが大好きでした。母はどちらかというと落ち着いた性格で、子供が外で遊ぶよりも、いつも目の届くところで遊ばせて、お話を聞かせたり、祈ることを教えたりして、しっかりとした教育を授けました。

### ◇ 思いやる心

カルメンは多くの兄弟の中で育ちましたので、自然に、互いを赦しあうことや、相手を思いやる心が育ちました。

また、姉として、妹や弟たちを世話しながらリーダーシップを発揮することも出来ました。

母と一緒に近くの美しい公園まで遊びに行ったり、祈りや宗教的な行事にあずかるために、よく教会にも行きました。

こうした小さい時のいろいろな体験は、カルメンが大人になってから、様々なかたちでよみがえってきて、自分の道を開くために大変役にたちました。

## 2. マンレサへ

### ◇ マンレサへ移る

カルメンがちょうど5才の時に、クリミヤ戦争が起こりました。

この戦争の影響でスペイン中の物価が値上がりして失業者が増え、衣料品を扱っていたサジェス家の店も危なくなったので、一家はヴィックからマンレサへ移りました。

マンレサは工業都市で、活気に満ちていました。カルメンはここで育つことになりました。

マンレサにはフランス系のミッションスクール、「エンセニャンサ学園」があったので、カルメンは8才の時からここに通うことになりました。

### ◇ ミッションスクール

カルメンは勉強はもちろんのこと、いつも心をこめて祈りました。

当時の勉強は今と少し違っていましたが、何年勉強するのも決まっていませんでした。

親が望むまで、学校に通うのが普通でしたが、カルメンの両親は教育熱心でしたので、カルメンは、ずいぶん大きくなるまでこの学校で勉強することになりました。

主な科目は歴史、地理、国語、数学、美術、家庭、聖書でした。

#### ◇ 幼き聖マリアの奉獻

この学校は、その教育方針として、マリアさまを尊敬し、女性の手本として、いつも見習うように生徒にすすめていました。それで、マリアさまを中心にいろんな宗教行事が行われていました。

その中の一つに11月21日に行われていた、「幼き聖マリアの奉獻」がありました。

マリアさまは 3 才の時に両親と共に神殿に上がって、自分自身を神さまに捧げたという伝説があります。

その様子をもう一度再現しながら、生徒たちは自分の心を神さまに捧げて、自分自身も自己中心ではなくマリアさまのように、愛をもって生きることを約束します。

カルメンも毎年、この行事に参加していました。そして、後年、自分が学校を創立した時、その教育の中にこの行事をとり入れました。

### 3. ルルドの貴婦人

#### ◇ 聖母マリアの出現

1858年2月17日、ちょうどカルメンが10才の時です。

隣の国、フランスのルルドという所で14才の女の子、ベルナデッタの前に、“マリアさまが現れた”というニュースが、すぐ、スペインにまで入ってきました。ルルドはピレネー山脈の近くにある、緑の美しい小さな町です。

この町の外れの洞窟にたとえようもなく美しい姿で聖母マリアが出現しました。

#### ◇ ベルナデッタ

ベルナデッタの家庭は貧しく、学校にも行けず、羊の番をして働いていました。身体は弱かったのですが、親思いで、信仰深い少女でした。

その日、妹と一緒にガブ川の近くまで薪を取りにいった時、川を渡るために、靴下を脱ごうとしていると、突然、すごい風が吹いてきたような音がしました。

驚いて、あたりを見回すと、洞窟の入口に、若い美しい貴婦人の姿がはっきりと見えました。貴婦人は白い衣服を身につけて、頭に白いベールをかぶり、

青色の帯をしていました。右の手首には白い大きなロザリオを掛け、ベルナデッタに優しく微笑みかけました。そして、ベルナデッタと一緒に祈りました。

貴婦人はベルナデッタに、何を訴え、何を語り、何を伝えたかったのでしょうか。

#### ◇ 三つのメッセージ

この時伝えられたメッセージは次の三つの言葉でした。

「世の人々が行いを改め、回心するように祈りなさい。」

「ここは神に祝福された地です。ここに聖堂を建てなさい。」

「私は無原罪のマリアです。」

#### ◇ ルルドの奇跡

100年以上たった今、ルルドは全世界のカトリック信者の巡礼地になり、今もなおマリアさまのお言葉どおり、岩の下から清らかな泉がわき出しています。

この泉の水はずっと流れつづけ、多くの人々が体の病気だけでなく、心の病をこの水

によって、いやされています。ここでは、ある人は回心し、ある人は信仰を深め、ある人は不幸から立ちなおり、全ての人の心がうるおされていくのです。

#### ◇ 初聖体をいただく

ちょうどこの出来事の一ヵ月後の4月18日、カルメンはマンレサの教会で初聖体をいただきました。(御聖体はパンの形の中に生きているキリストです。)

普通、その時、女の子たちは小さな花嫁さんのようにきれいな白い服と白いベールをかぶりますが、カルメンは白の服と水色のベールを着ていました。

それは、多くの画家たちがマリアさまを描いた時に用いた色でしたし、ルルドに現れたマリアさまが使っていた色でもありました。

この白の服と水色のベールは、その後、カルメンが創立した修道会の制服になりました。

また、聖マリア幼稚園の園児や、中学、高校の生徒たちもこの色を制服に取り入れて、ルルドのマリアさまや、創立者マドレ・カルメンの精神を学んでいます。

## 4. モンセラット

#### ◇ モンセラットの教会

また、同じ年、1858年、マンレサからモニストロールまで鉄道が敷かれました。モニストロールはモンセラットの麓にあるので、多くの人々はこの汽車を利用してモンセラットを訪れるようになりました。その中にサジェス家の家族もいました。

モンセラットには、高い岩山の中にベネディクト会の男子修道院や、マリアさまに捧げられた大きな教会があります。

モンセラットとはノコギリで切られた山というような意味です。天使の手によって準備された場所といわれるくらい巨大な美しいところです。

また、特に春が来ると岩の間から色とりどりの花が咲き乱れ、かぐわしい香りがあたりをただよいます。

この時、今のように道が整備されていませんでしたが、カルメンは 10 才の時に両親と共に、巡礼者として山を登っていきました。

この時、カルメンがどんな祈りをして、どんなことを感じ、何を考えたかは誰にもわかりませんが、人生の終わりごろに、

「私は修道女として、全てを捧げて生きる呼びかけをあの時、モンセラットで感じました。」と、なつかしそうに話していました。

#### ◇ 家族の中で

カルメンは 15 才になってからは毎日学校に行くことはなくなりました。

家で母の手伝いや、子供たちの世話をし、社会に出るための準備をしていました。この頃のカルメンの写真は残っていませんが、妹のメルチョーラの写真から大体、この時代の服装などを知ることが出来ます。

小さな弟や妹たちはお姉さんの言うことをよくききました。

けんかをしたり、わがままを言ったりした時、カルメンはすぐ反省できるように優しく話してあげたので、家庭祭壇の前へ行って、謝っている二、三人の弟妹たちの姿をたびたび見ることが出来ました。

カルメンは歌うことが好きでしたし、明るい性格でユーモアのセンスも持っていたので、知らないうちに家族の中心的存在になっていました。

## 5. 決心

### ◇ ボランティア活動

10代の後半から、カルメンは修道院に入ることを決心していて、修道院側からも内緒で許可をもらっていましたが、両親の強い反対にあって、しばらくの間、祈りながら待つことにしました。

カルメンは一人で泣きました。

両親はカルメンが苦しんでいる顔を見ていることが出来ず、泣くことを禁じましたが、その涙の原因をなくそうとは思いませんでした。

でも、カルメンは両親に従うことにして、明るくふるまっていました。そして、今まで以上に、家の近くにあった病院でボランティア活動に力を入れました。

恵まれない人々を見ると、自分の持っていたものを全部あげようと思いました。

いつも、弱い人、苦しんでいる人のことを自分の事のように感じて、助けようとする態度をずっと死ぬまで持ち続けました。

また、我慢強い人でもありました。いくら寒くても、決して暖かいところに近づこうとしなかったし、お食事の時も、一番おいしそうなものを他の人のために残しました。

しかし、わざとらしいところはなく、自然な笑顔で一番おいしいものを食べているような顔でした。

### ◇ 全てを神さまに

夜中や、朝早く起きて何時間も祈り続けました。

『私は修道院に入りたい！ 私は全てを神さまに捧げ、人々のために役に立つ仕事をしたいと強く望んでいます。それなのに両親は反対しています。どうすればよいのでしょうか？ 神さまの望みは何でしょうか？』それを知りたくて必死に祈りました。祈り、ボランティア活動、家事などの間に日々が流れていきました。

## 6. ルイスの事故

### ◇ ルイスを助けて

ある日、教会に行き祈っていた時、突然、心の中に何かを感じて思わず、「ルイスを助けてください！」(ルイスは一番下の弟)と叫びました。あわてて家に帰り、すぐ「ルイスはどこ？ 何があったの？」と聞くと、母はびっくりして「どうしてそんなことを聞くの？ ルイスは下の店で遊んでいますよ。」

まだ話が終わらないうちに男の人の声が聞こえました。母がドアの方へ駆けつけてみると、父ともう一人の男の人がルイスを抱きかかえて入ってきました。

「えっ！ 何があったの？ 死んでしまったの？」

「大丈夫、落ち着いて下さい。大きなショックを受けただけです。」

「いったい何があったのですか？」

「私が説明します。」

その男の人が言いました。

「この子は織物工場で、私と一緒にいました。いつものように機械のことが知りたくて、いろいろ質問していました。私がちょっと目を離したすきに機械に近寄りすぎて、滑車に挟まれてしまいました。そこにいた人達は手の出しようがなく、送りベルトがその子を巻き込むのを見ていただけでした。機械を止めてもどうしようもなかったし、当然のことながら放り出されて壁にぶつけられてしまいました。死んでもおかしくなかったくらいでしたが、大丈夫です。腕がちょっと脱臼しただけです。どうしてそんなことになったのか分かりませんが大丈夫です。」

#### ◇ 感謝の祈り

この出来事は1865年11月11日でした。

そして、ルイスはこの日から死ぬまで、毎年この日になると、特別な感謝の祈りを捧げました。

姉のカルメンにも「私が生きているのは、お姉さんのおかげです。」と、時々言いました。

カルメンは神の慈しみを感ぜさせる心の持ち主でした。

## 7. 十字架

#### ◇ 結婚の申し込み

表面的には嵐は静まっていました。

けれども根本的には何も変わっていませんでした。カルメンは自分の望みが実現するための機会が訪れるのを待っていただけでした。

その時、マンレサの裕福な商人の息子がカルメンに目を止めて、結婚を申し込みました。

お互いの両親も、良い話だと信じていたので、どんどん事が進められていきました。一番困ったのはカルメン自身でした。今までは黙ってさえいればよかったのですが、今度は自分の意志の反対方向へすべてが向かっていました。

#### ◇ 光る涙

「出来ません。絶対にありえないことです。」と言って神さまにお願いして祈っていました。

妹のメルチョーラはずっと夜、泣きながら祈っているカルメンを見て心を痛めていました。両親も『カルメンがそれほどいやがるのなら。』と一瞬、思ったことがありましたが、相手の人が何回も結婚をお願いするので両親も新たなプレッシャーをかけることになりました。

カルメンの気持ちを変えるために沢山の服や、女の子が喜びそうな宝石を買ってやりました。

両親は何よりも娘の幸せを願っていたのに、何故、その目に光る涙に気づけなかったのでしょうか。

#### ◇ 深い悲しみ

この時からカルメンはピエタのマリアさま(十字架から下ろされたイエスを自分の腕の中に抱きかかえるマリア)に親しみを感じるようになりました。

『誰も分かってくれない寂しさ、それを理解してくださるのは、深い悲しみを味わわれたマリアさまだけだ。』と思いました。

『私は本当のことを知りたいだけです。ある人は両親に従うべきだといいますが、人間よりも神に従うべきだと聖書は教えています。私はどうすればよいのでしょうか？私は本当のことを知りたいだけです。』

カルメンは十代の少女とは思えない、しっかりした強い心の持ち主でした。

## 8. 光を求めて

### ◇ 両親の悩み

母はカルメンの様子をうかがっていました。

黙想から帰ってきた時、再び歌を歌ったり、冗談を言ったりするようになりましたが、結婚の話を持ち出されると、すぐ上手に話題を変えてしまいました。

「ホセ、私はカルメンのことが気になります。結婚をしようとする女の子が 全く夢を持たないことがあるのかしら？」

「私が気づいていなかったとでも思っているのかね？ 私たちは間違ってい なかったのだろうかね。」

「ねえ、もうやめましょう。それより、あなたはカルメンとまじめにお話し をしなければいけないのよ。」

「そういう問題は母親と娘の問題ではないのかね。」

### ◇ ゴベルナ神父さま

ちょうどその頃、バルセロナから聖母の月の 5 月の間に講演をするために、当時の有名なゴベルナ神父さまがマンレサに来ていらっしゃいました。

カルメンは自分の悩みを打ち明けて、指導を受けることにしました。

神父さまはカルメンの話を知ると確かに彼女は神さまに呼ばれていることがわかりました。

それで、「もし、よかったら両親にお話ししてもいいですよ。」と、言ってくださいました。

カルメンはそれを聞くと大変喜びました。

待ちに待った言葉でした。でも、簡単ではありませんでした。

両親はなかなか譲りませんでした。もう婚約式は済んだし、すべての用意が出来ていました。いまさら断ることも出来ません。

神父さまの言葉もはっきりしていました。

「それはカルメンの道ではありません。結婚させることは不幸にさせることと同じです。」

### ◇ 新しいスタート

両親は娘をあまりにも愛していたので、今までの夢を捨てることは辛かったのですが、娘を不幸にさせることは出来なかったのとどう大好きなカルメンを神さまに捧げることにしました。

カルメンはもう 5 年近くも待ちましたので、許しが出てからすぐ準備をしてバルセロナの郊外にある礼拝会の修練院に入会することになりました。

1869年5月7日にカルメンは新しいスタートをきりました。



当時21才でした。

## 9. グラシア修道院

### ◇ 多くの出会い

カルメンは両親と兄妹、もちろん結婚の相手にも別れを告げて、バルセロナに近いグラシア地区にある修練院に入ることになりました。

友だち、近所の人、親戚の人も、こんなに明るく、美しい、賢い娘が全てを犠牲にして、修道院に閉じこめられることを理解出来ませんでした。

でも、カルメンは“閉じこもる”とは全然思っていませんでした。

むしろ反対でした。今までも、友だちと家族の小さな輪の中で動いていましたが、これからの多くの人たちとの出会いを夢見ていました。

グラシア修練院は小高いところに建てられていて、そこから街全体を眺めることが出来ましたし、また、遠くの海を見ることも出来ました。

特に月の出る夜は美しく感じられる所でした。

そこに広い土地があって、その中には果物の木、花も野菜畑もありました。小さな動物も飼われていました。

午前中は手仕事、たとえば刺繍、ろうそく作りなどや、畑仕事、動物の世話をしていました。

午後の時間はいろんな勉強や祈りにあてられていました。

修練長は太陽の光にあふれた部屋の窓を開け、ブラインドを上げておくのが好きでした。

それは彼女自身の務めだと思っていました。

修練女たちに対して心の窓を開けさせ、ブラインドを上げさせておくことでもありました。

それは明るくて、暖かい、楽しい雰囲気をつくり出すことでもありました。

### ◇ 何故？

カルメンは自分が修練院にいるということを夢のように感じていました。

そして一生懸命、修練院に慣れるよう努めていましたが、だんだんいろんな疑問を感じるようになりました。

『何故？何故なのでしょう？』

修練院の近くに、修道会が建てた女性のための更正施設がありました。

そこはいろんなことがあって、非行に走った若い女性たちが入っていました。

シスターたちはそのような女性たちに再教育をしようとしていました。

カルメンはちょっとお手伝いをしながら、彼女たちと話をすることが与えられていました。

## 10. 新しい道

### ◇ 教育の大切さ

非行に走った女性たちのことは、今まではカルメンにとって、別世界の出来事でした。でも、今は違います。その女性たちには顔と名前があって、そして、心もあります。その心は根本的には良いものですが、深く傷ついて寂しくなっています。一人一人の今まで歩んできた道、ぶつかった問題や悲しみなどを知るのはカルメンにとって大きなひらめきでした。もし、この女性たちがふさわしい教育を受け、そしてまじめに仕事をしていたなら、今、再教育を受ける必要があったのでしょうか。

女性を悪から守るためにはやはり教育が一番です。

しっかりした価値観を持って小さい時から教育を受けていたならば、良い家庭を作って、また、子供たちの心にも良い種を蒔き続けることが出来て、自然に社会が良くなって行きます。

#### ◇ 原罪と恵み

17世紀、一人の有名な作家、カルデロン・デラバルカという人が数多くの宗教劇を書きました。

その中の一つに『谷の娘』があります。

舞台は地上です。

男の子、女の子も生まれてくるとすぐ、悪というものに出会い、そして、その悪は大きな穴にその子を陥れます。

これが“原罪”の意味です。

その後は“恵み”というものが手を差し伸べて、穴から引き上げてくれます。

これは“救い”の意味です。

とうとう谷の娘、マリアが現れてきます。

“恵み”は穴に陥る前に彼女の手を取って助けたところから、人々はマリアが無原罪であるという意味がよくわかりました。

カルメンは考えました。

『若者たちのために、あらゆる悪の穴をふさいでしまいたい。

でも、それが出来なければ穴に陥ってしまう前に穴をよけることが出来るように導いてやりたい。

原罪の穴は仕方がないにしてもその他の穴は避けることが出来ます。

でも、果たして自分は教育のために神さまに呼ばれているのでしょうか？

それとも、今のまま留まるべきなのでしょう？』

#### ◇ 教える

カルメンはいろいろ悩んで、健康まで害してしまいましたが、最終的に相談するべき人に相談して、教育のための修道会に移ることになりました。

ドミニコ会です。

グラシアからもう一度ヴィックに戻って、そこでコル神父によって創立されていたドミニコ会に入りました。

そこでカルメンは大変信頼されるようになって、しばらく準備をしてから学校で教えることになりました。

## 11. 誓願式

### ◇ 初誓願

カルメンはトルテリヤからヴィックに帰って、誓願を立てました。一人前のシスターになるためには、いくつかの段階があります。カルメンは最後の段階に直面していました。それは、この誓願式でした。誓願式は結婚式みたいなものです。

カルメンは三つの誓願、清貧、貞潔、従順を通して、全てを捧げて自由にイエスさまと共に歩むことを誓いました。

もちろん、この誓願式には、両親、兄妹、友だちもみんな参列してカルメンと共に喜びました。

誓願式が済んだ後、サン・アンドレスの学校に行くことになりました。

### ◇ サン・アンドレス

この街の様子はマンレサやグラシアのことを思い出させます。

いたる所に高い煙突があり、黒い煙がもくもくと空に真っすぐのびていきます。

通りには学校に行けない子供たちが沢山いました。

そんな子供たちを見ると、みんな自分の学校に入れてやりたいとカルメンは思いますが、もう、超満員です。

トルテリヤから『カルロス派によって、村に火が付けられてしまった』というニュースがとどきました。

どうしてそんな恐ろしいことをするのかしら？

今、こんなことをする人もかつては無邪気な子供だったはずです。

その時、正しいことは正しい。間違ったことはいけないと教えてくれる母親はいたでしょう？

心のかぶりをやわらげてくれる妻はいたのでしょうか？

カルメンはあらためて、女性の教育の大切さを感じました。

そして、心の中で叫びました。

子供を教育することは人類を救うことです！

カルメンは人類を変えることを夢見ていました。

## 12. 試 練

### ◇ 別 離

1873年から76年にかけて、いくつかの悲しい出来事がカルメンの心に衝撃を与えました。

まるで、台風によって倒されそうになった木のように、彼女の心をふるわせましたが、かえってもっともっと強くなっていくのでした。

ある日、家族からの手紙がきました。

戦争のために今まで住んでいた家が爆撃されて、別の所に移らなければならなくなりました。

また、ある日、修道院長は

「シスターたち、私たちの創立者、コル神父様が亡くなりました。お祈りしてください。」

しばらくしてから、弟、フランシスコが訪ねてきました。

「フランシスコ、何があったの？」

「カルメン、もう知っていると思いますが、お母さんの具合があまり良くありません。」

「何かあったの？」

「先週の土曜日、階段を上がっていて、ふらっとなって……」

「フランシスコ、本当のことを知りたいの。何も隠さないで……ただの目まいだったの？」

カルメンは勇気を出して尋ねました。

「生きてるの？」

フランシスコはゆっくり首を横に振りました。そして、言いました。

「でも、死を迎える準備は十分に出来ていたんだよ。」

カルメンは泣きました。

亡くなった母、一人ぼっちになった父、そして、動揺している兄妹たちに思いを寄せて、言葉をつまらせながらつぶやきました。

「イエスさまはご自分の十字架に私たちをあずからせてくださったのね。」

そして、昔、神さまの呼びかけを感じ、家族に反対され、悩んだ時と同じように、今も十字架の前にひざまづいて、祈ることも、願うこともなく、ただ、そこに長い時間、神さまと共にいるだけでした。そして、慰めを得、力がわいてきました。

## 13. 教 育

### ◇ 教育への情熱

カルメンはその情熱の全てを子供たちの教育に注いでいました。

朝早く起きて、長いお祈りをしてから、学校で働いて、そして夜遅くまで丁寧に次の日の準備をしました。

「よく準備されていない授業は効果がありません。」

いつも繰り返していました。

しかし、あまり熱心に働きすぎたせいでしょうか、疲れや寝不足が重なって、とうとうひどい肺炎になり、死が予想されるほどになってしまったこともありました。

父親もカルメンの葬式に参列するためにサン・アンドレスに来ていました。

でも、神さまはカルメンの教育への情熱を認めておいででした。

多くの人々の祈りが聞き入れられて、ほとんど奇跡としかいえない状態で命を取り留めることができました

### ◇ 校長先生になって

健康が回復してから、カルメンはバルセロナに開校される学校の校長に任命されました。特に校長になってから教育に対する熱心さが増しました。

昼間だけでなく、夜も、そして、日曜日でも学校の門を開いて、なるべく多くの子供たちが教育を受けられるよう、つぎつぎと色々なアイデアを生かしました。

生徒の割合も月謝を払える子供たち、払えない子供たちを大体半分ずつにしています。

カルメンはいつも先を見ていた女性で、その当時の社会の必要に応じてくために苦勞

を惜しまなかったのです。

しかし、他のシスターたちは彼女の熱心さについていけませんでした。

この時からカルメンは周りの人たちにとっては煙たい存在になっていきました。

さらにこの時、彼女にとってはショッキングな事態が起きました。

今、自分が属しているドミニコ修道会は、まだ生まれたばかりで、創立者、コル神父は数年前に亡くなったのですが、いろんな手違いがあって、結局、この修道会は教会の認可を受けていなかったのです。

厳密に言えば、本当の修道会ではなかったのです。

#### ◇ 神さまの計画

カルメンはついに新しい修道会を作る決心をしました。

ちゃんと教会の認可を受けた、本当の修道会で、それも、子供たちの教育だけに専念する修道会にしたかったのです。

そして、その教育の手本をマリアさま、無原罪のマリアさまに求めました。

この決断に至るまでに、毎日、カルメンは悩みました。

カルメンに賛成していたシスターたちは何人かいましたが、最終的には4人になりました。その名前は、カルメン、カンデラリア、レメディオス、そしてエミリアでした。

## 14. 新しい地で

#### ◇ 神さまが望まれること

この4人の女性たちは、これからどこへ行って何をするのでしょうか。

誰もわかりません。

ただ、神さまの導きを信じて、バルセロナから船に乗ってマラガに向かいました。

マラガで2週間、観想修道会の所に泊めていただきました。この時のカルメンの思いは次の文章によく現れています。

「激しい戦いは終わって、この祝福された場所は、なんと平和に満ちあふれていることでしょう。

私のつまらない人生を神さまがご自分の手で導いてくださったことを思うと感激してしまいます。

私の人生は不思議なものでした。

若い時、母校の黙想会に参加して以来、私の人生はあなたの望みを探し求めることでした。

あなたに強く憧れていました。

そして、ついにその望みを見つけたと思った時、それは新たな出発の時でした。

あなたからの呼びかけに応え、絶対の信頼のもとに、あなたに従ったアブラハムのことを今までに何回思い出したことでしょう。

山に登りきってちょうど目の前に広々とした景色を眺めている時に、あなたはもっと高く、もっと美しい峰を見せてくださり、私はもっとそれに心惹かれる登山家のようなものでした。

今はこのまま、この静けさの中に残ってしまいたいのですが、それはあり得

ないことです。

あなたが望まないからなのです。

もし、ここに残るとしたら、若者の教育はどうなるのでしょうか？

まだまだ登る必要があるのです。

もっとけわしい道のりはまだ残っているのです。」

2週間後、カルメンたちは汽車に乗って、マドリッドに向かいました。

マドリッドの教会で祈っていた時、心の中で感じました。

そして、隣にいたカンデラリアに言いました。

「神さまの望みです。ブルゴスへ行きましょう。」

## 15. 聖マリアの無原罪修道会の誕生

### ◇ 新しい修道服

1892年の9月バルセロナを出て、10月の15日、ブルゴスに着きました。

ゴメス・サラサス大司教は喜んで迎えて、生活や仕事をするための建物を用意してくださいました。でも、設備は何もなくて、食べることも寝ることも、そのまま、床の上ですませました。

しかし、22日になって、

『シスターになりたい』と言って、一人の女性が仲間に加わりました。

そして、12月8日、無原罪の日が来ました。

その日、あのルルドのマリアさまと同じような、白と青の修道服を初めて 5 人のシスターが身につけました。

その朝、街全体がすっかり雪におおわれていました。

地面は白、空は青でした。

人々はそれが偶然の一致だと言っていました。彼女たちは、天のプレゼント、神さまの祝福のしるしとして、喜んでいただきました。

### ◇ すばらしいプレゼント

1893年4月9日、カルメン創立者は44才の誕生日を迎えました。

大司教様は誕生日のすばらしいプレゼントを用意して、それを 3 日後に届けてくださいました。

修道会の会則の認可でした。

「マドレ・カルメン、こんなに短期間で、全て手に入れるなんて、半年前に誰も予想していませんでしたね。」

会則、学校、新しいシスター、そして、こんなに沢山の子供達。私達に足りないものなどありませんね。」

「これは、マリア様の働きです。そして、私達は彼女の娘達です。」

生まれたばかりの修道会は、幼い子供が母親の存在を必要としているように、私達もマリア様の導きが必要なのです。」

そして、

『シスターになりたい』と思う、若い女性がつぎつぎと訪れてきました。

## 16. セゴビア

### ◇ ルイスの家庭

セゴビアには弟ルイスの家がありました。

ルイスは奥さんテレサと、4人の子供と楽しく暮らしていました。

カルメンに再び会えることは大きな喜びでした。

「カルメン、覚えていますか？」

僕が11歳の時にベルトに手を挟まれてしまったことを。

あの時、お姉さんのお祈りのおかげで僕の命が助かったんだね。」

このセゴビアで、司教様の理解と協力を得て1894年5月1日に、学校を開くことになりました。

マドレ・カルメンはこの時、次のように司教様に修道会の目的について話しました。

無原罪修道女の第一の目的は、神の恵みと自分の努力によって、自分の成長や完成だけでなく、同じように任された子供たちの心の成長や救いのために、マリア様に倣って努めることです。すべて神の栄光と社会の益になるように。

この学校が軌道に乗ると、すぐ、次の目的地、エル・エスコリアルに行くことになりました。

## 17. エル・エスコリアル

### ◇ 若い人たち

1895年8月28日にエル・エスコリアルの学校が誕生しました。

マドレ・カルメンは若い人たちと共にいることに喜びを感じていました。

「よい教育をする前に、また、世界を変えていくために、自分自身を変えていかなければいけないし、本物の女性になっていかなければいけませんね。」

「マドレ、無原罪会のシスターはどんなふうであるべきでしょうか？」

マドレ・カルメンは若いシスターから質問を受けるのが好きでした。そして、心にしみるように、ゆっくりと答えました。

「無原罪会のシスターはその時代の女性であると同時に、知識と徳にあふれた器のようなものでなければなりません。」

見せびらかすためのものではなく、人に仕えるためです。」

「マドレ、この本物の徳をどのようにして身につけることが出来るでしょうか？」

「いつもいつも、小さなことに誠実であること。そして、しなければいけないことを素直にすること。いつも緊張していなければいけないということではなく、かえって反対です。よく調律されたヴァイオリンの弦はメロディを奏できますが、強く張りつめた弦は切れてしまいます。」

「マドレ、私たちの教育者としての使命は何でしょうか？」

「私たちの使命は子どもたちと共に生きることです。」

子どもたちにいつも愛情と関心を持って接するようにしましょう。

そして、成功の時にうぬぼれないこと、困難の時にも落胆しないようにすることが大切です。そのためにも、いつも勤勉であるべきです。

でも、私たちは何と幸せでしょう！

神さまがこの世の中で一番大切にしていращやる、この子どもたちを私たちに任せてくださったのですから。」

## 18. マドリッド

### ◇ お話

マドリッドの学校は狭くて、小学生が身体を動かして遊び回するには十分な空間がないのですが、マドレ・カルメンは子どもたちと遊んで、お話をするのが好きでした。

「マドレ、今日はどんなお話をしてくださいますか？」

「フランスのあるお城に住む二人の姉弟のお話をすると、この間、約束してくださいましたでしょう？」

「それも、本当のお話ですか？」

「私の話はいつも本当の話だということは、もうお分かりでしょう。」

「真実は作り話よりも美しいものなのです。」

皆、輪になって座りました。

「二人はあるお城に住んでいました。」

お姉さんのファナは母親に育てられましたが、お父さんと考え方があまりにも違っていたので、ファナは大変苦しみました。お利口だったので、良い子になるよう努力しました。」

「そして、ファナは美しかったんですか？」

「それはもう、大変なものでした。」

でも、顔よりも心がもっと美しくって、お姫さまにふさわしいものでした。」

「それで、王子さまと結婚したのですか？」

「それに近い紳士と結婚しましたが、その後、未亡人になりました。」

両親の違った考え方のためにファナは苦しんだので、子どもたちを正しく教育する学校を作ろうと思いました。

私もちょうどあなたたちと同じ年ごろだった時、その学校の一つに通いました。」  
「マドレもそのために、この学校を開いたのですね。」

## 19. ポソブランコ

### ◇ 男の子の教育

マドレ・カルメンにはポソブランコにホセ・ポスエロという友達がありました。

セゴビアの学校を開いた時に手伝ってくださった方でした。

その方はマドレ・カルメンのやり方を見て、この町にも無原罪修道会のシスター達に来てもらって、ここの若い連中により教育をしていただこうと考えました。

そして、マドレ・カルメンにお話しました。

「男の子も受け入れてもらえないでしょうか？」



「彼等のために学校はありませんか？」

「あることはあるが十分ではないんです。」

マドレ・カルメンにとって不都合はありませんでした。

もし、彼女が少女達の教育の方に力を入れているとすれば、それは、彼女たちが正当に扱われていなかったからでした。

「少年達と同じ立場でしたら、彼等を受け入れてあげましょう。ただし、14 才まで。」と、答えました。

## ◇ 教 訓

そして、1899年9月8日、ポソブランコに新しい学校が出来ました。

ポソブランコの先生達はマドレ・カルメンが与えてくださった教訓を決して忘れることはないでしょう。

「厳しくするよりも愛情を持って、優しくするほうが効果的です。」

「でも、マドレ、時には……」

「ええ、このようなやり方で十分でない時には他の手段を使わなければいけません。優しさや冷静さ、厳しさと柔らかさをうまく混ぜ合わせる必要があります。」

「子ども達は自分のわがままやいたずらによって、私たちにその苦勞の賜物である栄光の冠を作り上げることがあります。」

そして、子ども達の生活にはいろいろな誘惑がありますのでいつも教育の使命を一生懸命果たすように努力しましょう。難しいけれど楽しい使命です。」

## 20、じっとしていられない

### ◇ 新しい学校

1902年、アルマデン。

1903年、バルデペニヤス。

1904年、ムルチャンテ。

1905年、サンタ・クルス。

1906年、マンサナレス。

マドレ・カルメンは毎年各地に学校を開きました。

穏やかな表情で一步步進みながら、修道会の道を固めていきました。

マドレ・カルメンは汽車で旅をする時に景色を眺めたり、祈りをしたり、考え事をしたりするのが好きでしたが、一緒になった人たちと会話をするのも好きでした。

ある旅行の時に汽車の中で 6 人の子どもを登録しましたが、それはまだ、学校が出来ていないうちのことでした。

このように誰からも信頼される人柄でした。

そして、いつも次のように若者達を励ました。

「出来る限り勉強して、教養と知識を身につけなさい。」

学校を出る時に人々を助けることが出来るように、心から優しい人になりなさい。そして、自分から言わなくても、マリア様の学校で学んだことがわかるようにふるまいなさい。」

## 21. 三つの恵み

### ◇ 病 気

1907年はマドレ・カルメンにとって、まさに激動の一年でした。

病気がかなり悪くなったのに、新しい学校の設立のために、あちこちから声がかかりました。

医者とはなかなかマドレ・カルメンの病気が何なのかわかりませんでした。

彼女自身も今まであまり気にしていなかったようでしたが、今はとても具合が悪くなり、食欲も喜びも感じなくなりました。

それでも、医者はあまり彼女の病状を重視しません。

「ご心配いりません。6月の暑さのせいですよ。

ここマドリッドは暑さが厳しいですからね。」

「では、エル・エスコリアルにお連れする方がよいでしょうか？」

「それも悪くないでしょう。」

もちろん、エル・エスコリアルの新鮮な空気と静けさは決して悪くはなかったのですが、それだけでは足りませんでした。

何よりもいろいろな心配事が病気の原因だったのです。

10月のある朝のこと、皆と一緒に起きなかったので、院長はマドレ・カルメンの部屋へ行きました。

「ご気分はいかがですか？」

「ええ、あんまり」

あまりにも顔色が悪かったので、急いで医者呼びました。

医者は来た時、またもや外れた診断を下しました。

前は軽すぎて、今回は重すぎる診断でした。

「一ヶ月も持たないでしょう。」ということでした。

マドレ・カルメンは落ち着いていました。

集まってきたシスターたちに

「私が死ぬと思ひ込んで、辛い思いをしているようですが、大丈夫です。

でも、お医者さんが可哀そう。私のことはいつも当たらないようです。」

「こんなに痛みがありながら、冗談などおっしゃる事が出来るなんて信じられ ません。

「まじめな話をしましょうか。今のところ私は死にませんからどうぞ落ち着い てください。神さまが修道会に与えてくださる、三つの恵みを見届けるまで は死にません。」  
皆、彼女の言葉に聞き入っていました。

長い祈りを通して神さまは何かカルメンにわからせたのでしょうか。

マドレ・カルメンは何か悟っていたに違いありません。

そして、話し続けました。

「私は教皇様から会が認可されること、マドリッドに修道院を持つこと、そし て、修練院をそこに移すまで死にません。」

そこにいたシスターたちは静まりかえっていました。

そこまで確信を持って言うなら、きっとその通りになるでしょう。今まででも、マドレ・カルメンが口にする事がそのまま実現されたことが多くありました。

時には少し恐ろしくなるほどでした。

この調子で春を迎えることになりましたが、具合はあまり良くありませんでした。

「このままでは駄目ですから、もっとしっかり病気が治るようにしなければいけません。」

「私が治りたがらないとでも思うのですか？ 私たちは神さまの手から健康も 病気もそのまま同じように受けなければいけないのです。神さまが望まれる こと、それが私たちにとっては一番いいことなのです。」

#### ◇ 一つ目の恵み

神さまは一つの恵みをもう用意していただきました。

マドレ・カルメンが他のシスターと外出して歩いていた時に、一枚のポスターが目につきました。

「あの貼り紙を見てください！ その別荘が売りに出されているんですって！」

「本当だわ。場所は最高っですね。プリンセサ通りは確実に将来性があるところですよ。ちょうど欲しかった場所ですね。」

#### ◇ トントンと

少しずつではありましたが全てが順調に進んでいました。

いつものように足りないものはお金でした。

でも、これも必要な時に、匿名の寄付というかたちで届きました。トントンとことは進んでいきました。

『こういうふうだとすぐ、創立者が待ち望んでいた三つの恵みをいただくかも かもしれません。』という不安が皆の気持ちの中にありました。

まだ、春の気配が感じられない頃に、プリンセサ通りの修道院は建設中でした。

そして、3月19日、マドレ・カルメンはシスターたちを呼んでお話をしました。

「今日、ヴァチカンに新しい会則を送りました。あと私たちに残るのは祈ることだけです。沢山、沢山、祈って頂きたいのです。」

ヴァチカンからの返事が返ってくるのには時間がかかると思って、あちこちのいろんな学校へ旅することになりました。

行けないところへは手紙を送ることにしましたが、リウマチのために腕を動かすのが大変で、手を使えない日が何日も続いていました。

ヴァチカンに手紙を出して、ちょうど半年目、1908年9月19日に教皇様からの許可が下りました。

恵みに満ちた聖母マリアを手本として喜びに溢れ、歩める道を若者達に示すことに教皇様は承認をしてくださしました。

これはもはや手の届かない美しい夢ではなく、むしろ、祝福された輝くほど美しい現実でした。

#### ◇ 教皇様の承認

この知らせは、22日にサンタ・クルスの学校にいた時に届きました。  
マドレ・カルメンの生涯で最高に幸せな日々の一つでした。  
手に電報を持ち、ほほ笑みを浮かべながら、我を忘れていたかのようでした。  
しばらくたってから、

「シスター達。聖堂へ行き、神さまに感謝しましょう。私たちの小さな会はこんなに祝福されているのですから。私はこれから全てのシスターたちに教皇様の承認を知らせるために手紙を書きます。」

『主の平和があなたたちと共にありますように

ずっと手紙を書こうと思っていたのですが、身体が弱いのと、忙しかったために遅くなってしまいました。でも、今日、大きな喜びを分かち合いたいです。教皇ピオ10世が十分検討された結果、私たちの修道会が家族、社会、また、私たち自身の幸せのために大いに役立つものと認めてくださいました。

神さまがこの世で一番愛しておられるもの……子ども達を私たちに預けてくださいました。子ども達を育てることは良い母親を育てることでもあるのです。このような仕事に呼ばれている私たちは多くの苦難に立たされ、また多くの困難を乗り越えてきましたが、ついにこの喜びの日にたどりつくことができました。これから、無原罪の聖母マリアの娘として私たちに対する神さまのご計画にふさわしく実行できるように努力していきましょう。

私たちの手本であるマリア様を見上げることによって、きっと、そのお力をいただくことが出来るでしょう。一人一人のために心をこめて祈ります。

カルメン・サジェス』

## 22. 復活祭

### ◇ 大きな喜び

1910年の復活祭はプリンセサ通りの新しい修道院に住むシスターたちにとって大きな喜びをもたらしました。

この日に8人の若い女性は新しい聖堂で誓願式を通して、マリア様のように自分の生涯を神に捧げようとしていました。

「マドレ、短い間に私たちはなんと多くのものを手に入れたことでしょう。」

「神さまからのプレゼントは本当に多かったですね。」

「本当ですね。よく祈りました。本当によく祈りました。」

「ヴァチカンから、良い返事がきますように……

マドリッドに自分の修道院を持てますように……

聖堂の工事が終わりますように……

満足でしょう？」

「とても。あなたたちが想像する以上です。ただもう一つだけ望みが残っているのです。」

それを聞いていたシスター達は、ドキンとしました。

『三つのことが実現されるまで私は死にません。』というマドレ・カルメンの言葉を思い

出したからです。  
そして、今、最後の一つが残っていただけでした。

## 23. 花嫁のように

### ◇ 掛け布団

マドレ・カルメンは  
『自分の命はもう長くない。神さまは戸口に立って私をお呼びだ。』と感じていました。  
そして、神さまとの新しい出会いを嫁入りを前にした、婚約者のような気持ちでいました。  
夏はサンタ・クルスのシスター達と過ごしましたので、皆はマドレ・カルメンに何かプレゼントをしてあげようと思いました。  
「何か必要なものはありませんか？」  
「そうね。臨終の御聖体を頂くときのために、掛け布団を一枚くださいませんか？  
私はもう、長くないから。」

### ◇ ユーカリの木

秋になって、マドリッドの書斎の窓越しに、マドレ・カルメンは嵐の吹き荒れる様子をじっと見ていました。  
運動場のユーカリの木は、まだ若くて、嵐の強さに負けそうな感じでした。  
シスター・イグナチアに、  
「嵐が木々を揺らしている様子が見えますか？ このように神さまも私たちを試されるのです。私たちを押しつぶそうとしておられると見える時があるのですが、実はもっと力強く生きていくことを望んでいらっしゃいます。」  
シスター・イグナチアはこの時とばかり、マドレ・カルメンを元気づけよう思って、  
「本当ですね。マドレも今、あまり元気ではありませんが、きっと良くなれますよ。」  
「私が言っているのは別のことです。私の健康は猛快復することはないでしょう。もし、麻布の余りぎれがあったら取っておいて下さいませんか。包帯として要るような時が来るのです。」  
「どれくらい要るのでしょうか？」  
「どんなにあっても足りないくらいです。私の葬式には、あなたたちは私の流す血を踏んで歩かなければいけないほど、私は傷だらけになっているでしょう。」  
「……………」  
シスター・イグナチアはマドレ・カルメンの痛ましい予言に、かえす言葉もなく黙りこんでしまいました。  
で、この予言は、悲しいことに本当のことになりました。

### ◇ 最後の望み

ちょうどその時、シスター・ルルデスが病室に入ってきました。  
そして、自分の耳を疑いたくなるほどびっくりしました。

「一体、誰が自分の葬式のことなど話す気になるのですか！」  
「私です。もうお分かりでしょう。長くはないですから。」  
彼女たちが苦しんでいるのを見てマドレ・カルメンは話題を変えました。  
「シスター、もう郵便は来ましたか？」  
「ここに持って参りました。司教様の手紙を待っていらっしゃるのでしょうか？」  
「ええ、でも、今日もまだ来ないわ。」  
「無原罪会の修道服を着るということと、修練期を始めることについての許可 を待っている志願者たちのことですね。まだまだ、長い間待つのですね。」  
「いいえ。もっと強く待つのです。今から、あなたたちは司教館に行って、事情を話していらっしゃる。私は聖堂で祈っています。神様は驚くべきことを 見せてくださるかもしれません。」  
そして、その言葉どおり、司教様は正式の書類は後で送ることにしてその場で修練院を移す許可をしてしまいました。  
1910年、三番目の条件、マドリッドに修練院を移すという最後の望みが完成されつつあったのです。

## 24. 心に残る日々

### ◇ 連れていってください

マドレ・カルメンの病気は悪化していきましたが、医者は大したことではないと思っ

て  
「心配いりません。糖尿病は多かれ少なかれ、症状に起伏があるものです。」と、言っ

ていました。  
マドレ・カルメンは、医者が間違っていることはもちろん分かっていました。

「シスターたち、私の病気はもう、治りません……。二度と起き上がることは ないでしょう。」

「マドレ、この薬を飲めばきっと治ります。」

「はい、はい、飲みますから心配しないでください。でも、何の効き目もない でしょう。」

「なんだか死んでしまいたいような感じがですね。もし、マドレが神さまに、『連れていってください』と、お願いしていらっしゃるのなら、私たちがマドレ の健康のために祈っても何の意味もないのです。」

「シスターたち。死というものは、いつも、何かやるべきことが残っている時 にやって来ます。私もまだ二つぐらいのことをやり残していますが、今、神 さまが呼んでおられる時なのです。一分前でも、一分後でもそれを変えるこ とは出来ません。」

### ◇ 苦しみを忘れて

5月になると、医者も、シスターたちもマドレ・カルメンの死が近いということを疑い

ませんでした。  
肝臓が悪くなっただけでなく、心臓も弱くなって、治療のため、両足は傷だらけになっ

てしまって、見ていられないような、哀れな姿でした。

その上、おなかが水腫のために極度にふくれあがって、皆、覚悟を決めないわけにはいかなかったのです。

心臓に負担がかかるという理由で麻酔もせずに、傷口を焼いたり、いろんな手当をしていただいた時も、マドレ・カルメンは痛みを訴えることなく、いつも黙ったままでした。

医者でさえ驚いて、

「この人は普通の女性ではありません。」と言ったほどでした。

でも、本当は苦しんでいる普通の女性でした。

ただ、心配しているシスターたちを元気づけようとして、自分の苦しみを忘れてしまう、母親のような存在だったのです。

#### ◇ マリアさまがいらっしゃった

「心配しないでください。天国からあなたたちを助け続けます。地上であな たたちを愛した以上に、天国で、あなたたちを愛し続けるでしょう。」

そして、弱くなった小さな声で言いました。

「動くように……」

あのシスターにちょっと動いてもっらうように……

マリアさまがいらっしゃるのが見えませんか？

場所を……場所をあけてください……」

目には涙がありましたが、心は歌っていました。

聖母マリアはマドレ・カルメンを慰めにきてくださったのでしょうか？

少なくとも、そこにいたシスターたちはマドレ・カルメンの輝く顔を見て、それを疑いませんでした。

#### ◇ 喜びに入りなさい

和らいだ雰囲気の中でマドレ・カルメンはシスターたち、一人一人に別れを告げました。

また、皆に赦しを願い、自分のために祈ってくださるようにと頼みました。

あるシスターには、健康に注意するように…

他のシスターには、年老いた両親を訪問するように…

そして、皆に、

「お互いに愛しあいなさい。助けあいなさい。

批判しあうのではなく、他人の中に見える良くないことを自分の傲慢や利己 主義のためだと思いなさい。」と、言い残しました。そして、涙ぐみながらこう願いました。

「修道会を愛してください。

いつも大切に守り続けてください。」

「私はマリアさまを創立者としてみてきました。私は役に立たない道具でしか ありませんから、未知がわからない時、マリアさまが手本です。マリアさま をよく眺めなさい。」

マドレ・カルメン自身も一生をかけて修道会を愛しました。

今、63歳、まだまだ若い。やるべきことはたくさん残っているのに、この世に別れを告

げようとしていました。

その命を少しでも延ばそうと思って、医者も、シスターたちも必死でしたが、病気を止めることは出来ませんでした。

「聖ヤコブの祝日まで、あと何日ですか？」

「マドレ、どうしてそんなことを尋ねるのですか？」

その時は何も答えはありませんでしたが、二、三日後、その日、7月25日が来ました。

朝から発作が8回も起きて、午後8時15分に、最後の発作の時に首を横にして、大好きなイエスさまのところに行かれました。

その時、イエスさまは

『来なさい。祝福された者よ。

私が無知であった時にあなたが教えてくれたからです。』

「主よ。いつ、私があなたに教えたのですか？」

『最も小さい者の一人にしてくれたことは、私にしてくれたのです。

私の喜びに入りなさい。』とおっしゃって、迎えてくださったに違いありません。

マドレ・カルメンの周りでは、家族の人たち、シスターたちが泣いていました。

彼らの耳に主の『喜びに入るように』という誘いが聞こえなかったのでしょうか。

彼らの涙を拭うことが出来るマドレ・カルメンの言葉が届かなかったのでしょうか。

『私は死に行くのではなく、私は生きているのです。……』

## 25. 創立者の遺産

### ◇ 一番大切なもの

マドレ・カルメンは1892年～1911年までのわずか19年の間に13校の学校を開いたほど教育熱心な人でした。もちろん、今ほど難しい手続きや条件は無かったのですが、それでも、頭が下がる思いがします。

マドレ・カルメンにとっては建物や設備よりも、生徒たち自身が大切でした。そして、恵まれない子供たち、教育を受けられない子供たちを黙って見過ごすことができませんでした。特にいろんなかたちで恵まれていない、貧しい子供たちを心に留めていたようでした。

マドレ・カルメンにとっては経済的に貧しい子供たちは大切でした。そして、裕福な人たちにはあまり関心を示しませんでした。その人たちは皆に大切にされているからだと言っていました。才能の少ない子供たちも大切に扱いました。この子供たちも優秀な人と比べれば無視されがちな存在であったからでした。家族の無い、親の愛を知らない子供たちも貧しい人たちでした。この子供たちも神の子としていつも扱いました。そして、社会的に排斥されている人々、非行に走る子供たちを特別な暖かい目で見て、出来る限りの援助をしました。

そして、いつも言っていました。「もし、私たちが同じような状況に置かれていたならば、きっと、同じようになっていたでしょう。」

相手がどんな人であっても、全てに対して尊敬を示しました。けれども、感謝されるこ



とは決して望みませんでした。時々、難しい問題にぶつかったり、その指導を受け入れなかった子供や親に出会ったこともありましたが、後からどんなことを言われても気にしないで、悪に対して、いつも善でもって応えようとしていました。

#### ◇ 良い教育とは……

子供たちに対していつも理解を示したマドレ・カルメンは教師に対しては厳しい人でした。1893年次のように書き残しました。

「教師は任された子供たちに良い教育を施すために、計画と秩序をもって決められたことをしっかり守るべきです。」

決められたことの中には次のようなものがありました。

(1) 授業をよく準備すること。準備されていない授業は子供たちに失礼であって正義に背くことです。

(2) 個別指導を丁寧にする。

(3) 教育効果をあげるために、静けさや沈黙を大切にすること。

(4) 結果だけでなく、生徒の日頃の努力を評価すること。

(5) 時間割をしっかり守ること。先生は教室、あるいは自分の持ち場に、生徒が来る15分前にいなければならないこと。

そして、よほど大切な理由の無いかぎり、そこを離れてはなりません。それは、生徒一人一人を迎えるためであって、1分の無駄もなく授業を始めるためです。

「人間性はたやすく悪に傾きますので、良い結果を得るために、しっかりした基準が必要です。」

そして、

「誰でも言葉よりも行動で教えるべきです。良い行いを通して教えることは素晴らしい効果を生み出します。お互いに、良い手本になるよう努力しなさい。でも、この良い手本は決して表面的なことであってはなりません。行いだけでなく、存在そのものが大事です。」

「神さまの愛が私たちの心を一杯にするなら、何もしなくても、知らないうちに子供たちの心に伝わっていくでしょう。」

「宗教や情操教育のことを教えるのは、それを読んで知っている人ではなく、自分自身で信じて実行している人です。」

「私が望む教育者は、持続性があって、しっかりした価値観を持つ人です。教育者のしぐさや態度、服装は、内面的調和から出てくる品性の表れです。外に表れる態度は心の表現であるべきです。」

「今、していることをしなさい。ただするだけでなく、神さまを喜ばせるため最善を尽くし

なさい。どんな仕事であっても大切なのは神さまを喜ばせることです。生徒たちを監督している時に、他のことをしたり、考えたりしないでそれに専念しなさい。小さな事に誠実でない人は、大きな事に対しても誠実に出来ません。小さな事、大きな事、すべて神さまの愛のためにする時、そのこと自体が教育することです。だから、今、していることをしなさい。そして、ベストを尽くしてやりなさい。」

「精神的に自由であるように努力しなさい。そうなれば、いろいろなことに振り回されることもなく、心の平安を保つことが出来るでしょう。」

「神さまが私たちに任せてくださった子供たちです。昼も夜も見守りましょう。これが私たちの仕事であり、関心の的であるべきです。生徒たちの性格や傾きを知ってから教育者がまず第一にしなければならぬことは、その心に良い種を蒔くことです。」

「医者が必要としているのは健康な人ではなく病人です。いつも、悪いことをした子供に対して、賢い医者と愛情深い母親として、その子供を見守りなさい。良き牧者としてのイエスさまを手本にしなさい。」と教えました。

## 26. 辛子種のように

### ◇ 世界へ

辛子種の一粒が成長し、1911年まで、スペインにだけ根を下ろしていた苗はだんだん他の大陸まで枝を伸ばすことになりました。

アメリカ大陸ではブラジル、ベネズエラ、ドミニカ共和国、カリフォルニア。

アジアでは、日本、韓国、フィリピン、インドネシア。

アフリカでは、ザイール、赤道ギニア、カメルーンなど。

世界の160近くの学校で多くのマドレスや先生がマドレ・カルメンの熱意を受け継いで若者の教育に励んでいます。国によって多少の違いがあっても、根本的に同じ理想を持って教育が行われています。

### ◇ 清らかに生きる

昨日と同じように生徒たちは私たちにとってはかけがえのない存在である。

神に愛されている者である。

私たちに任されている宝である。

成長の可能性を持つ器である。

そして、その生徒たちはいつか家庭の柱、社会の善良な市民になっていくはずです。そこにたどりつくまでの道標としてマドレ・カルメンは次のようなことを奨めています。マリアさまをいつも手本にすること。

子供を全ての悪から守ること。

尊敬と愛を持っていつも子供たちを見守ること。

子供たちが自分のためだけでなく、家族や社会のために役立つ存在に成長するよう導くこと。

そして、最後に、私たちの生徒はマリアさまの学校で教育を受けた者として、いつも清らかに生きることを願うことです。

## 27. 日本の地で

### ◇ 初めての日本

1953年の秋、3人のマドレスが海を渡って、初めて日本の地を踏みました。日本語が全く分からず、かなり違った生活習慣の中で生活していくのは並大抵のことではなかったはずですが、若さと大きな理想は全てを乗り越えさせる力になって、何年間か後、笑顔で様々なエピソードを語るようになりました。

その中の一人、マドレ・コンセプション( 帰天) にお話しをうかがってみました。ここで一つ、二つのハプニングを紹介したいと思います。

言葉の上でのトラブルはきりがありませんが、その他に、今から思うと楽しいこといっぱいありました。

たとえば、最初の1年間、日本語の勉強をしていた時には、経済的に大変切り詰めた生活をしていましたが、みんな心は豊かでした。

院長の誕生日が近づいたので、プレゼントを買うために、バスに乗らないで、何回か歩いて日本語学校に通いました。

ためたお金で傘をプレゼントしてあげようと思って買いに行きましたが、予算にあった傘を買って、帰って開いてみると、それは、子供の傘でした。

もう一つは、お小遣いとして10円もらった日がありました。

お菓子を買おうと思ってお店へ行ったら、おいしそうな菓子パンが見つかり、喜んで買って帰り、食べてみると、アンパンだったので泣きそうになったという話です。

今は喜んで食べられるアンパンですが、あの時はびっくりするような味だったのです。

### ◇ テレサ田村

2年間、日本語を勉強してから名古屋に来ましたが、住む家がなく、借家に住んでいた時に、最初の日本人マドレになった、テレサ田村が入会してきました。

入会の日は1955年12月7日、無原罪の祝日の前日でした。

東京で裕福な家庭に育った田村さんは4時頃に名古屋に着きました。そこに2人のマドレが出迎えに来ていました。ここからマドレ・テレサの話です。夕食の時間になりますと、大きなお皿に小さな魚が1匹置いてありました。『大きなお祝い日だと聞いていたのに、これだけかしら?』と思っていたら、「明日、大きなお祝い日ですから、今日、前の日、心の準備をするために、断食します。」と言われました。次の日、ちょっとしたご馳走が出て、にぎやかに過ごしましたが、その後の日々、寒いのと、淋しいのと、お腹がすいていて大変だったので、入会したことを『しまった!』とっていました。チャペルになっていた部屋が小さくて、マリアさまのご像の前に自分の席がありました。朝、祈りに行くと、まず、マリアさまに話しかけました。『マリアさま。今日までです。今日だけ頑張ります。明日になったら東京へ帰ります。』銀座が恋しくなったし、靴を買って、きれいになって、銀座を歩いてみたかったのです。自分の部屋にはもちろんストーブがなかったので、しもやけいっぱいになった手を暖めるために椅子に登って電球に手をあてるしかなかったのです。ある日、『もう我慢できない!』とあって、係のマドレのところへ行って、「もう、我慢できません。東京へ帰ります。」と言いました。すると、そのマドレは、「ああ、そうですか。修道生活は遊びじゃないから、いやだったら帰りなさい。」とあっさり言われて大変ショックでした。『止めてもらえんと思ってたのに……』それをきっかけに心を入れ替えて、一生懸命あやまって、ここに置いてくださるようお願いしました。その日から今日までマリアさまに見守られる日々が続いてきたわけです。

#### ◇ 聖マリア幼稚園の誕生・名古屋・神戸

そして、1958年の春、名古屋で聖マリア幼稚園が誕生しました。第1期生20数名、最初から良い評価を受けながら、だんだんレベルアップしてきて、とうとうモデルスクールとして認められるようになりました。

1986年から神戸でも二つの教会の幼稚園を預かり、経営し、4人のマドレスがその指導に当たっています。このようにしてマリアの幼児教育はそれぞれの地で実績をあげています。

## 28. 岐 阜

#### ◇ 遠足に来て

5年もたないうちに岐阜に聖マリア女学院高等学校が設立されました。なぜ岐阜でなければならなかったのでしょうか？

折から、修道会は学校を建てるために豊橋の近くに土地を買っていましたが、いろいろな問題が出て、なかなか手続きがうまくいかず困っていました。

名古屋の幼稚園の春の遠足が岐阜城に決まりました。岐阜城から見える岐阜の町は本当に美しいものでした。「この町にも一つくらい教会があるはずですよ。」と、一人のマドレが言い出すと、もう一人が「見に行きましょうか。」と言って、二人で教会を探しに行きました。

#### ◇ 教会での出会い

教会に着くやいなや、神父さまがあらわれて、おおきな声で、「よくいらっしやいました！ 私は長い間、あなたたちを待っていました！」と言われて、びっくりした顔を見ると、そのクワーク神父さまは説明を加えました。

「私は前から祈っていました。そして、北海道から九州まで、この岐阜で学校を建ててくれる、シスターたちを探しましたが、皆に断られました。あなたたちは私の祈りへの天の答えです。」

#### ◇ 聖マリア女学院高等学校

そして、さっそく教会のメンバーだった渡辺シズエさんに電話をして、岐阜県の役人をしている、ご主人の力を貸してくれるようお願いしました。

市長さんや県知事さんにまで話がだんだん進んでいって、あっというまに土地の話になって、今の福富の地に決定されました。

そして、次の春、1963年に開校となりました。

信じられないぐらいのスピードでした。

#### ◇ 福 富

福富はその時、もちろんトンネルもなく、学校へたどり着くまでの道らしい道もなく、まわりは一軒の家もありませんでした。

ただ、たんぼのまん中にマッチ箱のような小さな校舎があっただけでした。

仲間といえば、へび、うさぎ、きじ、そして、特に田植えの時期に美しいオーケストラを聞かせてくれるのは、無数のかえるの鳴き声でした。

たいへん自然に恵まれたすばらしい環境でした。

20人の生徒から出発したこの小さな学校は神さまの祝福と多くの人々の協力や、暖かいまなざしを受けて今の姿に成長しました。

そして、1986年に中学校開校にともなって6か年間の一貫教育を打ち出して、今まで以上に教育の充実をはかってきました。

#### ◇ 五つの花言葉

ここにも、マドレ・カルメンの精神や理想を失わずに、日本人の心に響く、五つの花言葉を通して、マリアさまの心を知り、マリアさまを手本にして、人の心の痛みが分かる、優しい心と、正しい価値観、国際感覚を身につけた女性を一人でも多く社会に送り出すようにスタッフが一丸となって教育に励んでおります。

稲穂のような謙虚さ	菜の花のようなあたたかさ
ひまわりのような明るさ	野のゆりのような素朴さ
雑草のような力強さ	

付

#### 韓 国

1984年、日本から3人のマドレスが隣の国、韓国に行きました。

一番困ったのは、やはり言葉でした。文法的に日本語に近いと言われていますが、発音の面ではずいぶん違います。

でも、このマドレスたちは早く韓国語をマスターして、ソウルに最初の幼稚園、そして、その後は大学生のための寮と修練院をつくりました。

この修練院でマドレになるための大勢の若い女性が養成を受けていました。

1991年から高校の修学旅行が韓国に決まったのも、両方の国民がお互いに知り合うため、そして、お互いに理解しあうことによって、もっと平和な世界をつくっていくためなのです。

#### フィリピン

1986年、4人のマドレスがマニラで修道院や大学生のための寮をつくりました。その他に、青空教室を貧しい子供たちのために開いています。

マドレ・クルスは自分の体験を次のように話してくれました。

マニラから離れたところで、10日間、ある家庭にお世話になったことがありました。そ

の時、感じたのは“フィリピン人の幸せは他の人々を幸せにすること、ということでした。

私が出た家は13人の家族でした。お父さんがなかなか仕事が見つからなかったのでとても貧しい家庭でした。

ちょうどクリスマスの日が来ました。その時のご馳走は、白いご飯、野菜と小さな魚、それも一人ずつのためにあったわけではないのです。でも、いつでもあるものを皆でわかち合うのは彼らの幸せです。

フィリピン人は貧しさのあまり、悪いことをする時もありますが、本当はとても優しく、いつも笑顔が絶えない国民です。

この子供たちに教育資金を送る里親制度を学校が取り入れて数年たちました。わずか100円の募金で、何人かの子供たちが幸せを手に入れることができることを考えると、私たちも嬉しくなります。そして、

“受けるよりも与えるほうが幸せである、”という聖書のみ言葉をかみしめてします。

…… 終わり ……

## 年譜

- |      |        |                    |
|------|--------|--------------------|
| 1848 | 4月9日   | カルメン・サジェス誕生        |
| 1856 |        | サジェス一家、マンレサへ引っ越す   |
| 1858 | 4月18日  | 初聖体                |
| 1865 | 11月11日 | ルイス・サジェスの事故        |
| 1869 | 5月7日   | グラシア修練院に入る         |
| 1871 | 5月8日   | ドミニコ会修練院に入る        |
| 1872 | 8月     | 初誓願                |
| 1872 |        | バルセロナの聖カタリナ学校校長となる |
| 1892 | 2月22日  | ドミニコ会を去る           |
|      | 10月15日 | ブルゴス着              |
|      | 12月7日  | ゴメス大司教、修道会承認法に署名   |
|      | 12月8日  | 無原罪修道会の白と青の修道服を着る  |
| 1894 | 5月1日   | セゴビアに学校を開設         |

- 1895 8月28日 エル・エスコリアルに学校を開設
- 1897 10月 マドリッドに学校を開設
- 1899 9月8日 ポソブランコに学校を開設
- 1902 11月21日 アルマデンに学校を開設
- 1903 5月1日 バルデペニャスに学校を開設
- 1904 6月29日 ムルチャンテに学校を開設
- 1905 7月5日 サンタ・クルス・デ・ムデラに学校を開設
- 7月25日 バラハス・デ・メロに学校を開設
- 1906 11月5日 マンサナレスに学校を開設
- 1907 12月 アロヨ・デル・プエルコに学校を開設
- 1910 2月26日 バルセロナに学校を設立する許可を取得
- 5月15日 サンタ・クルス・デ・ラ・サルサに学校を開設
- マドリッドで修練院開設
- 1911 4月30日 病に倒れる
- 5月14日 病状悪化
- 7月22日 手術
- 7月24日 聖母マリアの出現？
- 7月25日 帰天
- 
- 1953 8月19日 3人のマドレス来日
- 1958 4月 名古屋市に聖マリア幼稚園創立
- 1962 3月 6人のマドレス来岐
- 1963 4月 岐阜市に聖マリア女学院高等学校創立
- 1984 韓国・ソウル市に聖マリア幼稚園・聖マリア寮創立
- 1986 フィリピン・マニラ市に聖マリア寮創立
- 1987 4月 神戸市の二つの幼稚園で教育、指導
- 聖マリア女学院中学校開設
- 1989 4月 聖マリア女学院にルルドの小径造成
- 現在に至る

あとがき

この原稿を書き終わろうとしていた時、一人のマドレの死が知らされました。このマドレ・ヴィンタシオン・カデナスという人は長い間ブラジルの学校で働いたマドレでし



た。

1991年1月1日、異の痛みを訴えて、専門家に診てもらったところ、「すぐ、手術をしなければいけない……」と言われましたが、もう手遅れで、3月8日に亡くなりました。亡くなる数時間前に、だんだん顔が穏やかになり、平和に満ちていて、そして、この世のものとも思えないほど、とても美しく輝きはじめました。

その時、マドレの目がじっと同じ所を見ていましたが、突然、「創立者の姿が見えます！」と言いました。隣にいたマドレが、「どんなふうですか？」と聞くと、「真っ白の服を着て、手に大きな十字架を持って、私を祝福してくださっています。」

「治してくださるようお願いしたら？」

そうしたら、ほほ笑みながら

「いいえ。治すために来てくださったのではなく、私が安心して、死を迎えるように来てくださいました。」

そして、しばらく普通の会話が続いて、数時間後に、天国へ旅立ちました。

これを知った時に、私はとても感動しました。そして、この電気を書き終わった今、『マドレ・カルメンは大きな事、目立つことはあまりしませんでした、小さな事に対してとても誠実に生きた人だった。』という実感を持ちました。

自分の思いよりも、神さまの望み、自分の都合よりも人の事を優先させた生き方でした。今も昔と同じように、自分の学校で学ぶ子供たちや家族の人々を見守りながら、幸せになれるように、天国から祈ってくださるに違いありません。

1991年7月20日

アナ・マリア・カレロ

#### <著者紹介>

アナ・マリア・カレロ

- 1936年 スペインに生まれる
  - 1954年 聖マリアの無原罪教育宣教会入会
  - 1961年 来日
  - 1985年 聖マリア女学院高等学校校長就任
  - 1987年 聖マリア女学院中学校校長就任
  - 2006年 聖マリア女学院中学校高等学校退職
- 現在に至る

参考資料

- CARMEN SALLES MUJER DE AYER Y DE HOY
- DIARIO DE UNA CHICA QUE NUNCA LO ESCRIBIO
- LA EDUCACION EN EL PROYECTO CONCEPCIONISTA DE CARMEN SALLES